
あれ？あはは。転生しちゃった

露真乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あれ？あはは。転生しちゃった

【Nコード】

N4987V

【作者名】

露真乃

【あらすじ】

転生するだけ……。ほんとドイツとかのお手伝いにしたかったけどありきたりすぎたのでイギリスですっ あらすじ見ただけじゃわかんないよねっ だからあらすじ見ちゃった人は本編見たほうが得ですよ〜

え？ちょっと待って！このおっさん誰！？（前書き）

初めましてっ！の人も違う人もこれからよろしくっ

え？ちょっと待って！このおっさん誰！？

ハロー 僕はひろとっというんだ 男子で平仮名とかかつこ悪いよね

でね！なぜか最近皆から「ヘタレ」って言われるんだ なんでだろお

あゝ。かわいいにゃんこ？うわっ！かつちゃかないで！！痛い！この猫凶暴！！

うわっ！猫が噛んできたよ！！あれ？意識がとおくなってきた…？あははゝゝ僕死んだりして…

う？ここどこ？あ！死んだのか！あの猫なんだったんだろうな！毒猫？？

・・・てかマジで死んでる！？えゝゝ？？まだ僕中一だよ！？えゝ？？

・・・まあいいかつ

「今から君は転生します。」

うわあ！びつくりしたあ！！誰だよこのおっさん・・・。

「おっさんとはなんだよお！！・・・殺すぞっ」

「うわあああ！！ごめんなさいごめんなさい！！」

何この人。めっちゃ怖い！！逃げよ！！

「逃げるな！話を聞け！！」

「いやです」

「…」

うん。逃げよっ

「まあいい…。いまから君には転生してもらっ。」

転生って何？僕まだ食べたことないなあ

「ヘタリアという漫画を知ってるかね。」

「友達に熱く語られてあげくの果てに漫画を貸し付けてきたので知ってます」

「今からその世界へいってもらっ。」

うわ このおっさん大丈夫か？

・・・あ～～！！わかった！これ夢なんだ！！きっと猫に噛まれて
気絶したただだよ！！

「でわ行くのだ～～」

「え～～…これ夢でしょ？早くさめてよ～～。怖いし！！」

「夢じゃないし！！良いからはよいけ！！ユキ・カーランドよ！！」
「！」

「ええ！？待つて！誰それ！！」

「え？お前の名前だけど…。」

「カーランドってヘタリアの、イギリスの人名だよね！？」

「ああ。言い忘れてた。お前の名は今からユキ・カーランド。ヘ
タリアの世界でイギリスのお手伝いさんだ！」

「お手伝いさんならさ！名前一緒にすることないじゃん！！」

「え？だって考えるのめんどいしw」

ひどいつー!!行きたくないし!!!!

「いやっ!僕絶対に行かない!」

「いいから行けや!」

「あ~~~~~!?!」

そうして僕は転生することになった。強制的にね

え？ちょっと待って！このおっさん誰！？（後書き）

でこれからよろしくお願いしますっ

ほっ、本物！？転生って良いなあ~~~~？

ん…？ここはどこだ？？たしかあのわけわからんおっさんにふつとばされて…

まず起きようかな…って、ええ！？

僕・・・女の子になってる！？てか何このかつこ…！

パジャマかわいい！！今僕が来てるパジャマかわいいすぎだよ…！
ピンクのワンピース型のパジャマにうさ耳フードって…！！

「うわっ！！…ああ…。こいつがユキか…」

うわあああ？本物だあ…！僕そんなにヘタリア好きじゃなかったし
イギリスなんてかなり興味なかったのになんか一瞬でそんなことが
全部覆されたよ…！！リアルイギイギかわいい…！！

「なあ…一つ聞いていいか…？」

「は、はい。」

やっべ興奮とまんねっ…！

「お前は男だと聞いていたんだが…あとそのかつこなんだ？？」

「質問は一つじゃないんですか？」

「ノノノうるさいバカ…！早く答えろ…！」

「なぜか起きたら女の子でこのかつこでした 終わり。」

「まじめに答えやがれ…。」

「うわあああ…！ごめんなさい！すいません！でもこれ至って真面目
なんです…！だからなんか変な技かけてくるのやめて…！」

いてて…。これならまずいといわれているスコーン投げられたほう

がましたよお…

「俺のスコーンはまずくないぞ馬鹿あ！！」

「なに勝手に人の心読んでるんですか！！プライバシーの侵害です！！」

「お前がでつかい独り言いつてたんだろぅがあ！！」

やあああ！！もうやだ！！誰か助けて〜〜！！

「そ、そうだ！！アーサーさん？でいいですか？僕がお手伝いって言っのは知ってますよね？？」

「ああ…。」

「な、何をすればいいですか？？」

「なにもなくていいぞ。大体は自分でできるし…。」

「ええ！？じゃあ僕ここにいない意味ないじゃん！！」

「じゃあその『僕』っていうのやめろ。いちおう今女だろ。」

「え〜〜じゃあなんて言えばいいですか？？」

「私…とかか？？」

私…私…しっくりこない…

「却下」

「て、てめえ！！人がせつかく一生懸命考えたのに！！」

「自分のこと名前呼びじゃ駄目ですか？？」

「勝手にしやがれ！！」

「じゃあ勝手にさせてもらいます」

ほかの国のとこ行きたい…。

「アーサーさん。ほかの国のとこ行きたいです。」

「あ、ああ。いいぞ。今日会議あるからみんなに紹介しようと思つてたしな。いちいち聞かれんのかめんどくさいだろ？」

「そうですね。知ってもらえるのは早いほうがいいですし…」

「じゃあ行くか…。」

「え！？もう行くの！？」

「ああ。さっさとしろ。」

ふふふふイタちゃんとかにも会えんのかなっ 超楽しみなんだけど
？

登場人物紹介的なもの！…うん　ちがうね

「こ、こんにちわっ！…アーサーさんのところでお世話になってる行きといたしますです！よろしくおねがいします。」

うわあ！！最後めっちゃ噛んじゃったあ…。はずかしっ／＼／

「よろしくね〜」

「ほなよろしくなあ〜トマト食べる??」

「ご、ごほんつ。よ、よろしくな…。」

「ドイツは見た目怖いけどいいやつだから怖くないよあ〜」

「あ、はい…。」

うわあああ！！マナイタちゃん！！あ、違う！！生イタちゃん！！可愛いなあ〜。あ〜でもフェリちゃんだよね…こっちでは…。親分もすっごいかわいいいいいい！！

ど、ど、ど、ドイツとかもめっちゃかわいい！！何これ！すげーすげーすげー

「H A H A H A！！俺がヒーローさ！！困った時はいつでも頼るんだぞっ　まあアーサーの家に住んでることは気に入くないけどなっ　ご飯がすっごくまずいから気をつけるんだぞっ！！とくにスコーンはだめだ！絶対食べちゃだめだぞ！！」

「うるせえよ馬鹿あ！！！！」

「はは…。」

アル…かわいい？天国??ばく…違うや。ユキは悪いことしかしてないのに天国に来られるなんて…！！神様ありがとう！！

「ぼくはイヴァンだよ よろしく」
「よ、よろしくお願いしますっ」

なんとか笑顔をを保ったけど…

ロシアこええええ！！いやだ！この人なんか生理的に無理いい！！

「かわいいお嬢さん…。お兄さんはフランススっていうんだ。じゃあ行こうか！！」

「ど、ど、どこにですか……！？」

ふわああ！！この人も無理！！やだやだやだ！！やっぱ地獄だよ！！

「我は王ある！！気軽に話しかけるよろし！！」

あ……中国さんだあ？この人なら大丈夫だあ？癒される…。

「お、おれはロヴィーノだコノヤロー。覚えとけよ…」

うん。めっちゃかわいい！！萌え死……？

「私は本田菊と申します。趣味は空気を読んで言葉を慎むことです。どうぞよろしくお願いします。」

祖国……？塩塩塩塩……

「私はローデリヒといます。」

オーストリアさんだあ？雰囲気が好きなんだよね……

「エリザベータです。」

可愛い?・・・てか何でみんな人名なんだよ!!国名でいいよ!!

「バツシュだ!!覚えとくのである!」

この人いつも怒ってるから嫌いだあ…。

「ふえ、フェリクスだし〜。」

「僕はトリスっていうんだ。よろしく。」

によによ

「俺はギルベルトだ!!まあ、俺はかつこいいからもつ覚えただろ?」

でたWZA 不憫

「マシューだよ…。で、このクマさんが熊二郎さん…。」

クマ朗でしょww(クマ二郎です。

「誰?」

「マシューだよ!」

「H A H A H A いたのかい?マシュー」

「いたよ!!」

相変わらず影薄いなあww

「ピーター・カーランドですよ！よろしくですよ！！」

あゝそっかあ。シー君はイギリスの弟だったよね…。

「以上だ…。そういえばお前ちゃんとかいってないだろう？」
「あ！そうでした！えっと、ユキ・カーランドといいます！！」
「アーサーさんのお手伝いです！！ここには転生というもので来ました！元日本男児です！！よろしくお願いします！！！」

あれ…？こいつ何言ってるんだ的な目で見られたよ？？まあいいか。
気にしない気にしない

登場人物紹介的なもの！…うん　ちがうね　（後書き）

これ以外の人でもできるかもです〜〜

うああああ…。…楽園みたいやんなあああ？

「ねえねえユキちゃああん!!」

あ、フェリちゃん？かわえええ？

…うぶつ。いまお腹痛いんだった…。

「…？どうしたのユキちゃん。」

「あははは。いまお腹痛いんだあ…。」

「大丈夫？痛い痛いのとんで行け…。」

何このかわいい行動!!超可愛い超可愛い？治らないけど痛くなくなつたような気がしないでもない!!

「ほんとに大丈夫？ルート呼ぶ？」

「あははは…。大丈夫だよ…。いててて…。」

「うわあああ。ユキちゃん、死んじゃだよあ…。」

勝手に殺すな でもかわいいから許す!ハアハア

「…あれ？なおつた…。」

「ほんと!？嘘じゃない???」

「うん…。」

「よかつたあ…。」

かわいすぎる!ちがう意味でやばいかもおお!!

「ほ、ほんとに大丈夫？息すつごい荒いよ??」

「だ、大丈夫大丈夫…。」

「ほんとにホント？」

「うん。ほんとにホント。」

でもほんとなんで治ったんだろ…。やっぱフェリちゃんの可愛さのおかげかなあ？？

「もしかしてさ。ユキちゃんがお腹痛いのって、アーサーの料理食べさせられた？？」

「いや…たぶん違うかな？？料理はユキも人のこと言えないけど、いちおうアーサーさんは作ってない…。」

うん 最初はアーサーさん自分が料理作るって言ってたけどさすがにそれは僕が死にそうだったから…。

「うお、ユキ？こんなとこで何やってんだ？」

「あ、アーサーさん。フェリちゃんと話してただけですよ。」

「ふーんそうなのか…って、フェリの姿がどこにもないぞ？」

「あれ？さっきまでいたんですけどね…。ところで…それなんですか？」

「ああこれか？俺の新料理！ミラクルスコーンだ！！」

「ミラクルスコーン？」

何それ。いやな予感しかしない…。

「これはな、最初はバナナ味。次第にチョコ味へと変わっていった、その次はカレー味。で、最後にマンゴー味でfinaleだ。」

うっ。考えただけで気持ち悪く…。

「ほら食ってみろ！！」

「あの、いまお腹痛いんで……」

「さっきフェリになおったって言うてただろ？」

聞いてたんかい！

「いえ、また痛くなってきたので…」

「じゃあなおさらこれ食べ！うますぎて痛いのか吹っ飛ぶぞ！」

マズすぎて痛いのが吹っ飛ぶの間違いでわ？

「ほら遠慮すんなって。」

「や、やめてくださ……。」

「ほら早く食えよ!!!」

何これ……。いじめ？

「ほら！早く！」

「らめえええええええええええ！」

こうしてユキの腹いたは悪化したのであった。

あはっ うん

ユキだよ〜

いままで更新できなかったのはアーサーのミラクルスコーンで病院
送りになってたからさっ

嘘つくなって言われてもなああ…。

まあ嘘なんだけど（キラッ

うわあああごめんなさいいい

「って、何やってんだ？僕。こんなところで。」

ん〜なんか「ピーー」ってなの人に嘘ついてばこられてた気がするんだけど…

あ、夢か。夢ならしょうがない。

って、夢じゃない。

体中めっちゃ痛い。動けないしw

・・・？ん？何これ…。

どおしよ。

「アーサーさあん！アーサーさあん！！助けてえええ」

「なんだよユキ。どうしたんだってうわっ！何だよそれえええ」

「あ、ちよっ逃げないでえええ」

「だって、それ、うわあああああああ」

「アーサーさあああああん!!!!!!!!!!!!!!」

「アーサー君　ちよつとユキちゃん借りるねっ」

そう。僕の上に血みどろの水道管を持って怖い顔をしたコルコル星人、いやすみません。怖い顔をしたヴァンサンが座っていました。

…まさかそれですつと僕のこと叩いてたわけじゃないよね？

僕の頭とかからちが結構出てるんですけどw

「よいしょ。」

ひいつ！持ち上げられたあああ

「やめてえええええええええ！アーサー助けてえええええ。うわああああ！」

「もう、うるさいなあ。えいっ」

ごすっ

パタリ。

こうして僕の記憶は途切れた。

はっ！

＼（。ロ＼）ココハドコ？ （ノロ。）ノアタシハダアレ？

・・・なんてやってる場合じゃない…。

痛い！痛すぎるよ！

何これ！

うわあああん！帰りたい！おかあさあああああん！

猫の馬鹿やろおお！！

【ユキ ハ キョウフ デ ワレ ヲ ワスレテ コンラン シタ。
ー

ひつく。うつく。なんでこんなことになっちゃったんだよおお。

アーサー強いのに助けてくれなかった。

そりゃそーだよ。怖い顔で水道管持つてる人になんか逆らえないよね。しかも血だらけw

「うわあああああああん。誰かあああッああああ。びええええええええええええん」

「ふわっ！？ユキちゃん！？どうしたのっ！？」

「帰してえええええ。おねがいしますうう。何でもするからああああ」

「大丈夫。もうちょっとで帰すからねっ コルっ」

「…なにしようとしてるの？」

「んっ。アーサーに仕返し？」

それだけかああい！

アーサーのせいで僕巻き込まれちゃったのおお！？
家帰ったらこっちはこっちで仕返ししてやる！

「でもなんでボ・・・ユキを殴ったりしてたの？」

「え？ユキちゃんが傷ついたほうが盛り上がるじゃない。」

それだけかああ。それだけの理由で！

盛り上がりなくてもいいよ！

「あ、来たみたいだね。」

ふえ？

「ユキ！！！！」

「アーサー！！」

うんうん。感動のシーンだね

じゃ、つづく

アーサー、ユキを助ける、の巻（前書き）

前回の続きですお〜

アーサー、ユキを助ける、の巻

「アーサーさあん!!」

やっと来た！アーサー来てくれた！
助けに来たんだよね？

ちがったらぶっ殺しちゃうかもな

でも、助けるんじゃないかったらここには来ないよね？

うん。そう信じよう。

とか思ってるうちにアーサーはイヴァンサンにやられていた。

「え！？えええええええ！？早い！やられるのが早いよ！アーサーさあん！」

「ぐッ！なかなかやるな…。ユキ、ごめんな…。」

「ごめんな」じゃないよおお！

何あつさりとやられてるんだよおお！

ぐすん…。もう僕はここで終わりなんだ。

あ！アーサーさんにこれを言ったらきつと目覚めるな！
僕が攻撃されそうだけど…。

「あーあ。アーサーさんったら弱いなあ。まあいいや。アーサーさんのごはんおいしくないし。イヴァンさんアーサーをやつつけてくれてありがとう！」

「んだと、ユキ…。」

やったあ！起きたあああ

怒ってるけどそれは気にしない方向で

ドカツ！

「もう。アーサー君はうるさいなあ。ユキちゃんがう素直にお礼してるんだあくら僕もそれを受取らないとね」

ガクツ…

「アーサー ハ ヒンシ ノ ジョウタイ ニ ナッタ」

うあああああ！

逆効果だったあああ！？

アーサーさらに叩かれて完全に気絶以上のものになってるし
イヴァンさんは僕を奪う気満々になっちゃってるよおお！！

最初アーサーへの復讐だったのにいつの間にか僕を奪う方向にな
ってるよおお！！

なんで水道管を素振りしてるの？僕に水道管についた血が飛んで来
てるよ！

「ごめんなさいごめんなさい。嘘です。アーサー起きてえ！僕やられちゃうよ！僕あーさがいなくなったらどこすめばいいの？アーサーのまずいスコーンだって食べるよ！だから帰ってきてえ！」

「まずは余計だ、バカ…。」

起きた！今度こそ！？

イヴァンさんがまた水道管ふりあげてるよ！

やめてええええええ！！

カキンッ！

・・・？

「へっ、見え見えだ。馬鹿。」

「あれ？アーサー君はさっきまで僕にやられてたのにいきなり強くなっちゃった？」

「俺はもともとつええんだよ。」

アーサー！！かつこいいい！

「まあいいや。僕もそんなにユキちゃんがほしかったわけでもないし、返すよ。アーサー君。また遊ぼうね」
「やだよ」

こうして僕はアーサーに助けてもらったのだ！

でめたしでめたし

「ちょっとおおお！でめたしじゃないよ！頭殴られたりした傷全治三週間！最悪だよおお！」

しらね^p^

アーサー、ユキを助ける、の巻（後書き）

ユキが途中一人称僕になったのは混乱によるためです。

作者が間違えたのを直すのがめんどくさかった、そういうわけではないんです。

迷子のユキたん

今日は平和だな〜

だからお散歩しよう。

しらない道も通っちゃうもんね〜

あはははは。ルートさんとフェリちゃんが
追いかけてっこしてるよ〜

また訓練抜けだしたのかな？

てかなんでイギリスで訓練しちゃってるの？

勝手に人の国で…って…

ここイギリスじゃないいいい！？

イタリアじゃあん！！

え、嘘だあ！

迷った！？

って言うか…

ちがう国に来ちゃった！？

ヤバイよ！

僕パスポートとかもってないよ！？

どうしようどうしよう！

そうだ！ルートさんに助けてもらおう！

「ルートさあああん！」

あ、フェリちゃん捕まった。

「お、おお。ユキか？なんでこんなところにいるんだ？」

「いえ、それが…。」

「ヴえゝユキちゃんだあゝ一緒に遊ぼうよゝ」

「お前はまだ訓練中だろ！」

「ヴえゝもうやめよーよ、ルートお」

「だめだ。…で？ユキはどうしてここに来たんだ？」

「いえ、それが…お散歩してたらまよっちゃったあ」

「そうか…。まあ、またずいぶん歩いたもんだな…。」

「かなり疲れたであります！」

「フェリの真似はしなくてもいい。」

しゅーん（…）これ、僕の素なのになあ…

「まあとにかく。アーサーとこまで送ってやるからついてこい。」

「はい。って、またユキ歩かなきゃいけないのおお？」

「ああ。あるけ。」

「ええゝやだゝ歩きたくないゝ疲れたあゝ」

「いいからさっさとこい。」

「アーサー呼んで車で帰るゝ」

「だめだ。あいつをイタリアへは来させん。」

「なんでアーサーいいやつだよ？飯まづいけど。」

「それがだめなんだ。イタリアをまづい飯でいっぱいにされてはかなわん」

「そんなことするかなあ。」

「あいつならしそうだ。」

ふん？アーサー嫌われ者なんだなあ。

さすがに僕を迎えに来るのにまづい飯を持ってこないと思うんだあ
まあ、本気で怒ったらやりかねないかもねw

「ほら、ついたぞ。」

「ふえ？あ、ほんとだ」

「じゃあな。」

「ルートさんおくつてくれてありがとう」

「ああ。アーサーによろしく頼むぞ。」

「うい！」

「：返事はいだ。」

「はいであります」

「敬礼：するのは良いが手間差えるな…。つくづくお前とフェリア
シーノは似てるな。」

「そーですかー？」

「ああ。じゃあな。」

「じゃあね」

フェリちゃんに似てるだつてえ

最上級のほめ言葉だよ

僕にとっては。

迷子のユキたん (後書き)

皆さん！

一つ言っておきます！

ユキが女になってるってこと、忘れないでくださいね…？

作者は今思い出しました おい

ハロウィン (前書き)

一日遅れましたが…。
ハロウィンネタです！

ハロウィン

「アーサー トリックオアトリートォ！」

ありゃ、噛んじゃった…。

「あ、そうか。ハロウィンか…。って一日遅くねえか？」

「いいから～おやつ～」

「ああ。スコーンでいいか？」

駄目にきまってます。

「なんだと？」

「あるえ？声に出したつもりはなかったんだけど」

「ばっちり出たぞ？」

「じゃあいいや。パンプキンパイ食べた～い！買ってきて！」

「そんぐらい作ってや」「買ってきて！！！」…ああ

やったあ パンプキンパイ～

あ、帰ってきたときのアーサーのためにいたずらしかけちゃおうと

ユキトラップ仕掛け

「よしできた！！！」

ガサガサ

「あ。ちょおど帰ってきたあ！」
「やあ、あーーーーー」

ガラガラドッしゃあああん！

「アルフレッドさあん！？」

「ちよっ！何だいこれ！HEROをこんなとこに落とすなんて全く悪趣味だなあ！」

「なんでアルフレッドさんがかかるんですかあ！」

「あ、ユキちゃん！出してくれよう。誰かがこの俺様を毘にかけたんだ」

「すいません…。それやったのユキです。」

「ええ！？キミがかい！？」

「は、はい…。アーサーを毘にかけてやろうかと思って…」

「なんだいそれ！いいアイディアじゃないか！」

アルフレッドさんの目が眩しいよ…。

「あ、でもアーサーこれに落ちたらパイが台無しになるとこだった…。」

「え…。もしかして君アーサーにパイを頼んでるのかい？」

「はい？そうですけど。」

「やめといたほうがいいよおおお！！アーサーの作ったものは食べないほうがいいんだぞ！」

「あ、大丈夫です。市販のものです。」

「それなら心配ないんだぞ」

アルフレッドさんひどいなあ。もっともなだけども。

「アルフレッドさんもパイ食べてってください。」

「ほんとかい！？ユキちゃんはやさしいねえ！アーサーとは大違いだ！」

「おい。いまなんつた？」

ひいひい！アーサー帰って来ちゃったああ

「え？居たのかい？アーサー。」

「てか何でお前がここにいるんだよ！」

「えっと…。それは俺がヒーローだからさ」

「ああ…。もういい。お前には俺様特製パイをこちそうしてやるからな（ ）により」

「い、いじめはいけないんだぞ！た、助けてくれよユキちゃあああん！！」

「お大事に〜」

うん。ほんとお大事に

「あ、アーサー！パンプキンパイユキの分はあ〜〜？」

「いたずらしようとしてただろ。駄目だ。」

なんで知ってんのおおお？

「ええ〜〜？アーサーひどいよおおお！！パンプキンパイ〜〜」

「俺特製パイならいくらでも…（ ）によよ」

「やだあ〜！」

「ふふつ。ユキちゃん。ヒーローがいるから大丈夫さ」

「パンプキンパイ〜」

ううっ！パンプキンパイ食べたいよお。アーサー特製パイなんて絶

対にいやだあああ」

「心の声ダダ漏れたぞ。」

「うええええん」

トリックオアトリート！

だれか僕をアーサーから救ってえ！

そしてパンプキンパイっ食べさせてえええ！

じゃなきゃいたずらしちゃうぞおゝゝゝ！！

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいゝゝゝ！」

アーサー特製パイ…。

まずい…よ…う…。

がくっ…；…；

風邪引いたあくですよ

「ほんとに大丈夫か？」

「大丈夫だって…」

どうやら僕は風邪をひいてしまったようだ…。
熱が40度近くあるんだ…

だるいよう…。

頭痛い…。

「お粥作ってやろうか？」

「結構です。」

「遠慮すんなって。」

いやあああああ！

遠慮なんてしてないよおお！

「だ、大丈夫だよアーサー！家事とかいっつも僕やってたからアーサーとはたぶんやり方違ったから逆になんもしないほうがいいかも！」

「いいから。大丈夫だ、寝てろ。」

大丈夫じゃないよおお！

すっごく心配！とくに料理g（ゲフンゲフン

おっと、咳が止まらないなあ

「ほら、咳してんじゃねえか。早く寝ろ。」

「うっ…。間違っても料理作らないでね。」

「うるせえ、寝ろ。」

びよ、病人にうるせえって言ったよこの人！

ひどい！！

もう、ふて寝してやるううう

「じゃ、早く寝ろよ（ニ）」

な、なんですか今の笑顔…。

「にこ」って言ったよ「にこ」って！

え？あれデレてきな？

てかやべえ興奮とまんねえええ

「おい」

「はい？どしたのアーサー」

「もぞもぞ動いてないでほんとに早く寝ろよ？」

もぞもぞさせてるのはアーサーのせいだよお！

「わかつたか？」

「はい…」

はう…眠いかな？

おやすみ…？

「ほうわっ！」

「わっ！なんだよ…いきなり奇声あげておきやがって…。具合は大丈夫か？」

「え？あゝ…うん。もう大丈夫っぽいよ」

「そっか、よかった。でも今日一日は寝てろよ？」

「うん。」

でもほんと気分良くなったな？
なんで？

寝てただけだし…。

僕もともと風邪とかひかないしな。
健康だからかあ

「つて、あれ？アーサーもしかしてさ、ユキのことずっと診ててくれた？」

「なっ、馬鹿！別にお前のためじゃなく…。俺にうつたら困るからなんだからな！」

ツン？ツンですねわかります

「お前今…なんか変なこと思ってるだろ…。」

「別に？思ってないよ？」

ん…。こつちの世界来てからなんかこ　　いうこと思っの多くなっ
たなあ…w

「ほ、ほんとにお前のことなんて心配してなかt）ry」

「はいはい。わかりました。」

「お前…信じてないだろ…／／／」

「ん？信じてるよ？」

「嘘つけ馬鹿あ！」

あゝアーサーかわいw

でも今回はホントにありがとう　　アーサー。

風邪引いたあゝですよ (後書き)

終わり方微妙だあゝ

ほんとにアーサーの料理食べてさらに体調悪くするユキを書きたか
ったんですが…。
めんどくさくなっちゃって

ぐすん……。イヴァンさん怖いよ……

「ん~~~~!!いい気持ちだなあ~~~~!!」

こんなに朝から気分がいいなんてっ!

どうしたんだろう!

こんな日に限っていやなことが起こるわけ~~~~……

「みーつけた」

起こりました。

こんな日だからこそ、起こったんでしょうか。

気が抜けてる日こそいやなことが起こりやすい。

教訓でしょうか。

「イ……イヴァンさん……こゝ、こんにちは……」。

笑いが引きつったかも……。

「えっと・・・あの・・・何を見つけたんですか？」

「もちろんユキちゃんだよ。コルっ」

ええええええ！？意味わかんない！
何この人怖い！

「ユキなんか見つけてどうするんですかあゝ...」
「もちろん拉致だよ。それ以外なにあるのさ。」

ひ、ひいやあああああ！拉致？今拉致って言った？

「じよ、冗談ですよゝ まったくもうイヴァンさんったらゝ...」
怖い怖い怖い怖い

逃げるべき！？

うん、逃げよ...はうあっ！

「どこ行くの？逃げるなんて許さないよ？」
「ど、どこにも行きませんよゝ...。だから離して...」
「離すなんてサービス僕にはないよ」

怖いいいいい！

アーサー助けてえ！

「アーサー！！怖いよ！助けてアーサー！」

「何騒いでるの？アーサー君なら今嘘の打ち合わせに呼び出されてるはずだよ。」

なんでそんなものに行ってるのおおお！？

「今頃きつと閉じ込められてるかな」

笑顔で怖いこと言ってるううう！

「あ、あの・・・今回はどうしてユキを拉致・・・？」

「それは・・・なんとなくだよ。」

なんとなくで拉致！？

怖すぎるよおお！！

「ユキを拉致してどうするつもりですか・・・？」

「ん〜。それはあとで教えてあげるから楽しみにしてて」

楽しみに！？

できない！

できそうにない！

・・・こうなったら！

「あの・・・なんでも言うこと聞くから・・・許して・・・。」

これ言ったら話してくれる気がする~~~~~！

するんだけど！

「うん。じゃあ言うこと聞いてね？」

「はい。」

「僕に拉致されて」

「いやあああああああああああああ！」

そう来るか！

この人頭の回転速いいいいいい！！

「あれ？なんでも言うこと聞くなって言ったの君だよ？じゃあ守んなきゃ。」

・
・
・
アーサー。

今までありがとう。

きっと僕は……

二度目の死を迎えることでしょう……。

さようなら。

後、最後の頼みね？

助けて！ help me！！！！！！

やっぱり死にたくないよ！

イヴァンさんなんかさっきより怖い顔になってる！

だれかあああああ！！

「…えっと…これはなにプレイ？」

え？誰か来た！

ぐすん……。イヴァンさん怖いよ……。 (後書き)

だれだか分りますよねww
ヒントは変態です

続く!と思う……

お兄さんキター
(前書き)

ロシアのキャラが違っって言われたよ

うん。なんかロシアってキャラ微妙なんだ。僕の中で
ちよっと違っところあるかもだけどそこは勘弁！

お兄さんキター

「えゝ・・・っと。これはなにプレイ...?」

うあああ！危険人物増えたあ！

えとゝ...もうわかりますよね!?

あの髭で変態で変態で変態で髭の人です！

「ちょっとユキちゃん!?お兄さんのこと悪く考えたでしょ!助けてあげようと思ったけどやめた!」

「助けっ、って・・・ええええええええ!?!ほんとに!?!ほんと!?!」

「さっき思ってたこと撤回したらかわいいユキちゃんを助けちゃうかな?」

「うん!撤回する!」

「わかったよ。いま助けてあげるよ。」

やったあああ

あれ？でも…。

「待つて？フランスさん。確かあなた…弱いですよね？」

「し、失礼だな！そんなこと言うとはんに助けないよ！？」

いや、助けるもなにも…。

「あなたが口出すと火に油注いでるだけの気がするんです…。」

だつて戦つて勝つなら良いよ！？

けど負けたらさ、イヴァンさんの怒りが増すだけだと思つんだ！
そしてフランスさんには勝ち目がないとおもんだ！

「大丈夫大丈夫。お兄さん、今日は秘密兵器持つてきたから」
「え？秘密兵器つて…？」

核爆弾？

いやいや、危ないよね
さすがにないかw

えつと…なんだろう。

「秘密兵器って何持ってきたんですか？」

「エロ本」

駄目だこの人^p^

「それがなんの役に立つんですか。」

「エロ本を差し出されて夢中にならない男はいないと思うんだよね
お兄さん。」

・・・イヴァンさんから重たい空気が伝わってくる。

「健全な中学生の前でそんなもの出さないでください。」

僕一応生前男の子だからね。

そして中学生だったからね。

まあ生憎エロ本にはあんまり興味もてなかったけど

「しかもユキは女の子なんですよ?」

「あはは、ごめんね。でもユキちゃん。アーサーの家掃除したら
こう言っのいっばい出てくるんじゃない?」

ザツツライト!

そのとおり!

確かに掃除してると出てきます。

そのたびに僕はアーサーにお説教するのです。

『ユキが掃除やるって言いだしたけどエロ本くらい自分でしまっ
いてよ!』

ってねw

あの人意外と懲りずにエロ本みつけれてるんだw

「で?ユキちゃん。助けたほうがいい?」

「うん。助けてほしい。けどフランスさんじゃ無理な気がするの
でなんか違う人呼んでもらってもいいですか?」

てか今きずいたけど・・・

フランスさん来てから僕なんか冷静になってる...?

「なんかユキちゃんお兄さんの扱いひどくない!?」

ん...。

めんどくさいなあ...。

あ、でも逆にこの状況はあそべるかも!?

ぶりっこモードオン

「えっ？そんなことないよぉ？」

「え、ユキちゃんいきなりどうしたの……。」

お兄さんキター
(後書き)

ユキちゃんはあるて遊ぶことにしたようです

ぶりっこモード発動！

「えゝ？そんなことないよゝ？」

「え、どしたの……。ユキちゃん……。」「

どうもしてません。

あ、でも女子のぶりっこてみてるで見苦しいけど
やるとなんか面白いねゝww

・・・

僕も見苦しいのかなあ…。

「えつとゝ…。二人ともっ！今日はこのへんで見逃してくれないか
なゝって……。」「

「コルっ」

無理ですよねゝゝ！
すいません！！

わかってましたよ。
絶対無理ってこと……。！

「わかった。今日は良いよ フランシス君も運がよかったね。」

やっぱり無理ですよ〜って、ええ！？

いいの！？

ほんとに！？

「えつと〜…本当にいいのになって・・・」

「だって今日は僕おなか減っちゃったもん。」

「てか何でお兄さん運がよかったとか言われちゃってるの？」

「だってフラシンス君よわいじゃない。かわいいユキちゃんに免じて許してあげたんだよ。ユキちゃんいなかったら君は今頃きつと棺桶の中かな？」

怖い！

とてつもなく怖いよ！

でも…。

逃がしてくれるなら…！

逃げるよ！？

「そ、それでは！」

「うん。ユキちゃんバイバーい（＾し＾）ノシ」

あ、イヴァンさん・・・

さっきアーサーが閉じ込められてる的なこと言ってなかったっけ？

まあいいか。

なんかあの人地獄の底からでも這い出してきそうだしww

あ、なんか今「馬鹿あ！」って聞こえた気がするw

空耳だな。

周りに誰もいないし・・・ってあれ？

僕迷っちゃったかなあ？

だって・・・こんなところないよね？

こんなじめじめしてて

暗くて狭くて・・・

あれ？

せまくて・・・って・・・。

僕閉じ込められてるじゃん！！！！！！

え！？

いつの間に！？

イヴァンさんじゃないよね…。

だってさっきあんなに快く見送ってくれたし…。

罨！？

どっちにしろ僕危ないよね！

これ拉致ってやつだよね！！

やば！

テンションあがってきた！

ぶりっこモード発動！（後書き）

ユキちゃん拉致編です。
誰でしょう。

ヒントは変態です

テンションあがってきちゃった

え〜と？

まず何のために僕を拉致したのかな…？

叩いてみるか・・・って、うわっ！？

え、なんでいきなり動いた！？

どこ行ってるのこの箱！

て、テンションは上がってるけどちょっと怖くなってきたかも・・・

どうしよう・・・

「だ、誰ですか…」

・・・

返事はない。

そりゃあそつだよね・・・

うひゃあ！

にしてももっと揺れないように運転してほしいかな・・・

わっ！

止まった・・・

早くおろしてほしいかな・・・

って・・・

いやあああつあああつあ

外からこの箱叩いてる人いるううう！？

すごい鈍い音が響いてるよ！

やめてやめてやめて！

うるさい！

頭痛くなってきた…

『うあああああああああああ』

そ、外から悲鳴…！？

てか今の変態フランス（笑）の声じゃ…？

もういい。

寝よう。

テンションあがってきちゃった（後書き）

諦めてユキちゃんに寝てしまいました。

変態フランス・・・どこに連れていくつもりでしょう・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4987v/>

あれ？あはは。転生しちゃった

2011年12月27日20時49分発行